

44669



改教時報

第十七號

每原紙

明治三十一年十二月廿六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十五年一月一日發行(毎月二回(一日、十五日)發行)

目次

社説

◎明治三十五年、吾人の覺悟

◎昨年の四大事件

論説

◎鑛毒問題と佛教徒

◎道徳的意志の養成

(ヘルバルトの教育談)

社、會

◎四周年を迎ふ◎小學校教師たれ◎宗教法案◎教界彙報

◎紛々録

雜録

◎臺灣の新年

信泉

◎永久の命

家庭

◎育兒談

改教時報社

文學士 和田 鼎

楠 龍 造

柴 田 常 惠

文學士 和田 鼎

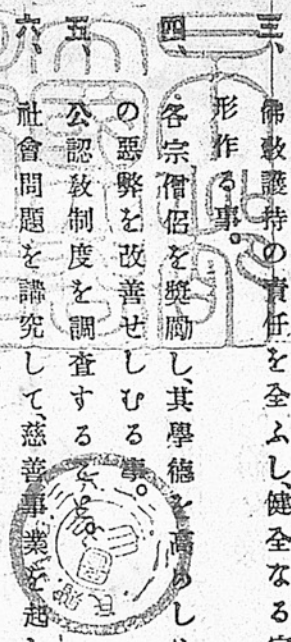
文學士 白山 生

(五)

も、兎角不振の狀を免れざりしに愛國婦人會の活躍なるは、とし、或は理に於て許すべきも情に於て許すべからざるの

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査する事。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。



○政教時報第六十九號目次

- 社説
 ●明治三十四年を送る……………
 ●第十六議會……………
 ●德川時代の救濟事業…………… (柴田常惠)
 ●臺灣の佛教…………… (本多學士)
 ●先德餘香(其八)……………
 ●大草慈善出獄人成績……………
 ●人の我を憎む時に…………… (百目木劍虹)
 ●議會の開院式●明治三十四年の宗教界等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
 一、本誌定價左の如し

一	部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無	送
					料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし
 東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年十二月廿一日印刷
 明治三十五年一月一日發行
 發行兼編輯人 百目木劍虹
 印刷人 清水朝太郎

政教時報

明治三十五年、吾人の覺悟

宜なる哉、古人が歳月に關守無しといひ、又光陰矢の如しといひけんこと、吾人は大々的覺悟を以て明治三十四年を迎へたりしが、所期の十が一、百が一をも果すを得ずして、茲に又明治三十五年を迎ふることとなりぬ、吾人は今如何なる覺悟を以て、此多事なる明治三十五年を迎ふべき歟、曰く他なし、去年の新春を迎へしと同一覺悟を以て、復今年を迎へんのみ、例となれば、今年の來るや、敢て去年の來りしと異なるにあらざ、日は日々東より出で、月は夜々西に入るを始めて、人獸草木各其所を得ること、去年と今年とに於て、指したる異なるべからざるなり、况んや又吾人の所期や決して一年半歳を以て、成功し得へき小希望小覺悟にあらざして、長久に繼續すべき大希望なればなり、然るに茲に筆硯を新たにして、故らに讀者に見えんとするものは、單に一偏世の形式に拘泥するにあらざして、一日の計は早朝にあるが如く、一年の計亦元日にあること、不易の眞理なれば、一は以て、本年に限れる事情に就て覺悟を陳べ、一は以て從來の希望を一層に新にして、之を誓はんが爲なり

吾人は前に多事なる三十五年と言へり、何をか多事といふ、新年早々不吉なる文字を羅列せんと欲する者にあらざれ共、

我國經濟界の不振は、敢て去年と大差無きなり、政府は外債に失敗し、内國債亦募り得る餘裕無しとして、進行中にある事業に對しても、中止若くは繰延を爲さんとするや、今猶昨の如し、不確實極まる清國償金を以て、一時の遺線算段を爲さんと計畫すれども、これ唯帳面上數字を入れ換ふるに過ぎずして、之が爲に厘毛も增收あるにあらず、斯る淺薄なる計畫を以ては、假令一時だも、不振の經濟界を救済する能はざるや、火を見るより明なり、然れば如何にして、此經濟界を順境に回し、財政の基礎を牢固たらしむべきやは、實に我等四千五百萬民が等しく腦嚮を絞るべき問題に屬し、本年は最此の點に於て健全なる計畫を立つべき、其計畫を實施すべき年廻りに當れり、然れども是等の問題は直後に局に當る者のあり、若し夫れ一國民とし立論すれば、節儉力行といふ四文字を各自に守るべしと云ふ、昔流義の間違無き陳説を呈するに過ぎざるなり、其他に至りては徐ろに攻究する所あらん、

本年は衆議院議員の任期充ちて、總選舉の行はるべき年なり、大凡選舉競争社會を腐蝕する者は、近來稀に見る所なり、賄賂の行使となり、權力の行使となり、詐譎の行使となり、有らゆる敗徳汚行は、何時の選舉にも行はれざること無し、近時新聞紙の報ずる所によれば、東京市下谷區にては、僅に區會議員の選舉に於てすら、汚穢なる醜行を演せるものありて、選舉の神聖を潰がし、遂に再選舉を爲すを見る、是を以て推すも、本年總選舉の時に際せば、全國到る處に、斯る

も、兎角不振の狀を免れざりしに愛國婦人會の活潑なるは、

とし、或は理に於て許すべきも情に於て許すべからざるもの

融開あるを耳にすべきや、殆ど疑を容れざるなり、予輩國民道徳の増進を企圖し、社會風教の進達を計るものは、實に張目留意せざるべからざる所なり、或は言はん、斯る政治上の事は予輩宗教を以て本領とする者の容喙すべき所にあらずと、是唯六號活字の眞理たるに止まる、何となれば、立法院の清濁汚隆は我帝國國民一人として直接間接に利害の影響を受けざる者無く、宗教を本領とする者も決して政治的關係を脱する能はざればなり、况んや、總選舉に際しては、前に舉示せるが如き社會を腐敗せしむる行爲多々なれば、宗教道徳に志あるものは、決して黙々に看過すべからざるや、論を俟たざるなり、

軍人分捕問題の如きは、余輩多く言ふを欲せざる所なれども、今や徒らに沈黙を守る能はざるに至れるを悲む、其事件の起れるや北清擾亂中にありと雖も、其問題を解決し、善後策をして遺憾なからしむるは、方に本年の大責務に處す、元來軍人なるものは、武士は喰はねど高楊枝といひ、又花は櫻木人は武士と謳歌せられて、世人より尊敬を受け、農工商の上班に列し、東方正義國民の美質を代表せし者なり、今の軍人は固より古の武士なる者と同視すべからずと雖も、其専ら金錢と生命とを愛惜すべからずして、一種崇高雄偉の氣象を有し、生命以外、金錢以外に卓然超越する所無かるべからざるは、古今を通じて東西に亘りて、動かすべからざる原則なり、古の武士なる者には此氣魄を有し、此覺悟を養成し、禮讓廉耻をこれ重んじたる者、所謂武士道と稱する者を固守したる

所、即ち傲然三民の上に跋扈せしめて、之を尊重したる所以なり、然るに今や時勢の變り、教育の結果か、軍人は唯命令と服従との二より知らず、征清役以來は頗る跳梁の極弊實に陥り、命令服従は變じて、傲慢と阿諛となり、弊の及ぶ所は軍人に禁物なる金錢を愛し、生命を惜むに至り、遂に不體裁なる分捕問題の生起するに至れり、豈歎すべきの至ならずや、之を聞く、北清事件の當時清廉なり規律嚴肅なりなごいふ名譽を我軍隊の博せしは、誠に當初暫時の事にして、かの諸外國が恣に分捕掠奪して、其掠奪品を公然競賣せしに拘らず、我軍隊は犯す所最少く、偶々犯したる所の物品も、上長官の嚴命によりて之を抛棄せる如きを見て、之を稱賛せしも、其後に至てや、諸外國は斷然掠奪を禁ず、寧ろ曩日掠奪せし金品を以て、占領地の人民を賑救するさへあるに、日本軍隊は、元來資給の他國軍人に比して薄きに苦めると、又嚴令を以て威嚇せし上長官の行爲の潔白ならざるを見聞せるとよりして、兵士は終始占領區域内に於て、商品を奪掠するなど、清民の怨望を買ひ大に聲價を落せり、上長官も之を知らざるにあらねど、傷持つ足の自ら曩日の如き嚴禁を取てするを得ずして、頗る不評判を招きたりと、之れ猶世人の多く言はざる所なれども、確たる事實談なり、之れを要するに、軍人の腐敗は歴々として世人の耳目に觸れたれば、根本的治療を爲さざるべからず、今回の瀆職軍人等は不日處分せらるべし、これ固より盜賊を逮捕する如きものにして、應急の必要なるべきも、之れあるが爲に吾人未だ容易に安心すべからざるな

り、要は教育の根底より一大刷新を施し、精神的教育を盛にせざるべからず、崇高なる宗教の趣味を知らず、精神的教養に飢ゑたる者の行爲は、毎に芳香なきや斯くの如しと知るべきなり、嗚呼余輩は區々たる今回の一事件に付て云々する者にあらず、深く軍人の腐敗に憂慮すればなり、昔者漢の相國丙吉春に當て牛の喘ぐを見て憂色あり、事に路に當る者須らく、軍人腐敗の善後策に於て最意を留めよ、

實に従前の男子の企圖をして、後へに隱若たらしむるものあり、佛敎界に於ても、東亞佛敎會を始め、諸方に婦人會續々興起せらるゝあり、又従來の婦人會は擴張せらるゝを見る、近時足尾鑛毒事件に關しても、一部の婦人は自ら鑛毒地を巡視し、貧兒を携へ歸りて養育する如き、數へ來れば從來無爲なりし婦人社會は、頗る生色活氣あるを見る、此形勢は今年も猶繼續せらるゝなるべし、况んや木紙前號にも記せる如くモルモン宗の來ありて、一夫多妻主義行はるゝに至りし勢あり(公然にはあらざれども、従前も蓄妾の風俗あれば、此風と相合して、妻妾並べ蓄ふる風は盛なる傾あるべし)、然れば婦人問題、家庭問題は愈々大にすべき潮勢あり、依て本誌は茲に家庭の一欄を新設して、聊此趨勢に伴ふ所あらんと欲す、是亦本會の綱領に添はんと欲する微意に外ならざるなり、

昨年の四大事件

昨年の社會現象として、殊に注意すべきは、女子の運動の大に活潑の狀を呈せしことなり、男子社會は元氣消沈し、活氣なく、施設企劃に見るべきもの無きに反して、女子の云爲は見るべきもの少からざるにあらざるや、女子大學の設立を見よ、勿論男子の助力を待つや大なりしと雖も、其始めは廣岡淺子女史の熱心なる運動に基きしにあらざるや、愛國婦人會を見よ、奥村五百子女史一たび歌唱してより、貴婦人社會は奮然として起ち、大々の運動を開始せしにあらざるや、かの軍人救護の事業の如きは、前に已に男子に依て企圖せられしと雖も、兎角不振の狀を免れざりしに愛國婦人會の活潑なるは、

嗚呼明治三十四年去る、余輩は此一年間の出來事を追想して四箇の特異なる事件を探り得たり、曰く星亨殺害事件曰く田中正造直訴事件、曰く村上博士脱派事件、曰く名古屋の七人斬、政治上、宗教上、其他一切の社會現象に於て、此四個の事件以外、人の意表外に出で世人を驚かしたるもの或は之あらん、然れども余は以上の出來事の如く、或は悲み或は怒り或は恨み、或は惜み、或は憐み、幾多の感情同時に發したるどならず、此等のもの或は理に於て不可とするも情に於て可とし、或は理に於て許すべきも情に於て許すべからざるもの

あるが如く、殆んど其判断に苦しめり、此種の事件は共に同一に論すべきに非ずと雖、皆是れ一見、常識を逸したる狂者の舉動に類するの觀あり、伊庭想太郎氏は社會道德のために身を犠牲に供して悪政專家を殺すと自稱し、田中正造氏は足尾銅毒事件のために十有餘萬の被害民に代りて直訴すと稱し、村上博士は其佛敎統一論のために脱派するの止むを得ざるに至れりと稱す、只最後の事件は一惡漢の復讐的行爲に過ぎず、しかも明治聖代の今日、白晝、劍を抜きて遂に七人を倒すに至りたる、人をして警察の存在を疑はしめ明治三十四年の史上掉尾の一怪事として、傳へられ覺ゆる戦慄恐怖の念あらしむ、社會缺陷の奇怪なる現象として、又實に注意すべきの價値を存す、其意表外なる點に於て、其人より狂人の如く視らるるも本人は甚真面目なるの點に於て、其決心の堅き點に於て四者皆其轍を一にするもの、如し、我邦社會の現状が如何に缺陷を有し又如何に不平均に又如何に恐怖すべきもの、此間に潜伏するかを證明するに餘りありといふべし、此間或は政治界の大人物を失ひたるを慨するものあり、國法の無視せられたるを慨するものあり、或は社會道德の完からざるを憂ひ、或は國民制裁の力足らざるを悲み或は一銅山翁のために十有餘萬の民をして飢餓の悲境に陥らしめたるを嘆き、或は憲政實施の今日此の如き異例の舉あるを怪みたるか如き、要するに其理に於て其孰れか是とし、情に於て孰れか否とするの傾きあり、甲は大に其情狀の酌量すべく或は大に同情を表すべき所以を説き、乙は寧ろ現在よりは將來を

慮り、正義公道、博愛仁義のために、國法を無視して直に人を殺し、或は畏れ多くも直訴するも尙可なりとすとの觀念を生じ、以て惡例を後昆に遺すの不可なるを説き、丙は事止むを得ざるに出でたる所以を論ず、此の如きの所謂日常談話の一間題たるのみならず、坊間に流布する新紙の上に於ても又展、散見する所なり、村上博士に至りては或は宗門の爲に惜み、或は學術の爲に賀し、或は信仰の爲に憂ひ、是非の評又罵々たるもの、如し、然れども此等の議論は一步を過れば、或は千里の差を生ずるが如き大謬謬に陥るとなしとせず、故に余輩は極めて慎重なる態度を以て徐ろに考一考せんとを讀者に奨めんと欲する也、余は今此に單に事實の記載に止めて徒らには非の批評を加へざるべし然れども此四大事件は事實なることを記し、而して此出來事を生ずるに至りし周囲の事情は確かに此事實の原因たり證明理由たりしことをも記し、社會の缺陷は事實也、社會大物の腐敗は事實也、青年の墮落志弱行も事實也、社會制裁力の至らざるも事實也、鑛毒問題も事實也、憲政の完備せざるも事實也、國法の時として無視せられたるも事實也、宗教界の不振も事實也、新主義新學說の歡迎せらるるも事實也、警察の不注意も事實也、此事實以外、尙多くの恐怖すべき事實、戦慄すべき事實の潜伏し、發動し、若くは起り、若くは起らんとするもの蓋し無數億ならん、今や新年に際して過去を回想すれば、曾て相悲み相憐み、或は批し或は論じ、或は賛し或は反したるシーサーやブルタスや、ボヒドノスチ

エフや、ルツソーや、ニーチエや、過ぎ去て夢の如く、兆民居士の無神無靈魂も、露國宗務大臣の「憲法政治の惡弊」も、田中智學居士の「宗門の維新」も村上博士の「佛敎統一論」も、乃至彼の紛々擾々たるもの一括して屑籠に投せられ、塵の如く灰の如く、幻の如く露の如く、雲の如く霧の如く又一顧の價値なきものも如し、よどみにうかぶうたかたのかつ消えかつむすび、泡となり沫と飛び散て跡なきものに類せざるか、余輩は暫く彼等を過去帳に葬り去り彼等を抹殺し盡し此に筆を新にして幸福にして光明ある新年を迎へ更に世人か如何なる新裝を着し、什麼の新曲を奏し、允慶の舞を演ぜんとするかを見んと欲す、嗚呼將に來るべき新問題、新主義、波瀾は果して如何新佛敎は年と共に新を加へて新々佛敎と稱すべく、舊佛敎徒は年と共に舊を加へて舊々佛敎と號せらるべきか、我徒別に新裝の誇るべきなしと雖、敢て輕薄者流の擧に倣はず、依然として十二の綱領を掲げ、一意社會の改善進歩に努め、國家と宗教とのために貢獻するところあらんとす、讀者希くは之を諒せよ、(村 風)

嗚呼通け、爾殺風景なる明治三十四年よ、嗚呼來れ、爾平和なる新年よ温き春風よ共に來れ。

論 說

鑛毒問題と佛敎徒

和田 鼎

鑛毒問題は實に十餘年間の長きに亘つて然も更に其解決を

見ざる明治聖代の大々的怪問題である、行政上の問題として、も經濟上の問題として、將又社會的問題として、實に一個重要な問題であるにも關らず、今に於て何等の見るべき結果に遭逢しないのは向に聖世の一大怪事と稱すべきである、人或はこの問題を以て陳腐なりとし是に向て云爲するのを迂遠なりとするものがあるがそれは單にこの問題の名が陳腐であるので其實に至つては極めて新らしくまた極めて適切な問題であることを知らないからである、吾等は固より行政官でもなければ行政學者でもない、從てこの問題に對する行政上の處置については容喙する權利を有しない吾等はまた經濟家でもなければ經濟學者でもない、從て之が經濟上に關する討究に至つては毫も云爲する力を有しない、只吾等は一の社會問題として是を見るの上にならば一言を費さざるを得ぬのである、茲に吾等の最も不審に堪へないのは然く重要な問題が何故に是迄社會一般の同情を買ひ得なかつたのであらうかといふにあるまた夫が何故に今日急に社會の大問題として論せらるゝに至つたかである、吾等の見るところをして誤なからしめば、人命よりも金錢を貴重なりとする所謂一部の政治屋なるものか、加害責任者と被害民との中間に介在して私利を計り事實を曲げた形跡があるので、社會をして被害民の哀訴が至當の理由なきもので畢竟針小の事實を棒大にしたに過ぎないものと思はしめた點が少くない、是か一の原因であるうと思はれる、また一つには被害地は一縣中の一部分で他は更に痛痒を感じないか若くは銅山の爲めに利益を得て居る地方も

あるので、縣會に一致の運動を見るとか難い邊もあろう、人情紙の如く同情の念に乏しい今時の人にはあまり珍らしくない現象である、また一つには被害の性質が急激のもの即ち震災とか洪水とか海嘯とかいふ一時的のものでなく、たとへば肺病患者の如く極めて長時間の間にギリギリと疲病したので、世人の注目を與く事が甚だ粗であるからでもあろう、また一つには何事によらず一の問題が起ると、夫を利用して私利を營なまうとする悪漢が飛出して來て愚昧な農民を煽動する様な事實があつて、世人をして一箇の山師的行動と見なさしめた邊もある様に見ゆるこの中でも第二の原因が最も有力なものであると思はれる、次にこの問題が近時再び八ヶ間敷なつたについては、被害民が地方行政官の曖昧なる處置に憤慨し哀願の途に望まざるを斷念して、こゝに直ちに中央政府に向て哀願を試みんとして大舉上京を圖りたるも、不慮の舉動として警官の之を途上に喰止めたる爲め意外の大珍事となつて、無辜の農民が凶徒囂集の罪に問はれて司直の裁判を受けるに至つたこと、一つは是迄曖昧の問題としてこのつて居つた被害地は果して鑛毒そのものも影響であるや否やの問題が、専門學者の分拆の結果として決して争ふ可らざるも事實と確證せられたこと、今一つは田中正造氏が前訴の一件とが動氣となつて簇々被害地へ巡視する者を生じ、是迄對岸の火災視したもの迄か一度實地を照査した結果、被害地の瘡痍所謂歳寒くして民飢に泣くの慘状を目撃してこゝに湧然同情の念を惹起するに至つたからであらうと思ふ、殊に田中氏が十

餘年一日の如く家を忘れ、財産を消費し、聲を大にして一意専心この問題の解決を叫びその何れの方法も遂に何等の結果を見るに及ばざるを慨して斷然代議士の職を辭し身命を賭して、至尊の鹵簿を驚かし奉つた至誠の熱情は深く社會の人心を感動せしめたのである、世の惻巧者は之を狂者の態であるといふて笑ふたかもしれぬ、世の虛榮家は之を名を求むるの念に出でたものと卑しんだかもしれぬ、然し吾等の如き愚者は深く氏の至誠に感動し大にその仁義の士たるに服したのである、今の日本は惻巧者と虛榮者のあまりに多きに堪えぬ時代であつて、かゝる狂愚者の今少し多からんとを熱望する時代であると思ふ、吾等は氏が汚れ果てたる代議士の名を棄て、こゝに大義士の活きた手本を示されたのを見て日本の爲めに喜はざるを得ないのである、吾等は氏の至誠に深くも感動してこゝに鑛毒問題の爲めに世の仁者に向て同情を求めんと欲するのである、吾等は氏の直訴によりて至誠の如何に人心を感動せしむるかを知ることが得て偉大の教訓に接したのを喜ぶのである、殊に代議士の職を辭した理由は、若し是か先例ともならず私利の爲めにヤタラに直訴する代議士を生せんことを慮つたからであるといふに至つては、これか狂者や愚者の直似し得らるゝところであらうか、鹵簿を驚かし奉つるについては固より身命を擲たねは出來ぬ、これか虛榮者の學び得る所であらうか重ねていふ、吾等の見るところを以てして誤なきものと思へば、鑛毒問題か何故に是迄世の視聽を惹起するに至らなかつたかといふ、理由と何故に近來この問

題か大に世人の耳目を聳つるに至つたかといふことを了するに足ると信するのである、果して然らば該問題は其名に於て陳腐たるにも關らず其實に於ては洵に刻下の緊急問題であると言言してもよからうと思ふ、さきにも述べた通り吾等は、吾等の意見はないではないがそれは所謂素行考であるから、自家専門の範圍を越えて行政上の處分や、經濟上の論議に立入ることを避け、社會問題として之を論せんとするのである、そうして佛教徒か該問題に對する處置如何を述べて、警醒の一助にもしたいと思ふのである、

今や鑛毒有無論の時代は過ぎて善後策如何の問題に移つて居る尙くも一度足を鑛毒地に踏み入れた者は、少くとも「ドウカせねばならぬ」の感想を得るに相違ない、吾等もまた實地に被害地を照査して、荒蕪に歸した幾千町の田畝と飢饉に濱した數萬の痛民が慘状とを目撃して、佛國大革命前佛國農民の窮狀を書いた、ヤングの旅行記を吾同朋の上に覽見するの不幸を歎じたのである、で、社會問題として大に世人の注意を惹起し一日も早くこの問題が解決せられて、田中氏十餘年間の素志も届き窮民も再び聖代の恩澤に浴して鼓腹擊壤の曉を見るに至らしめたいと思ふ、吾等の實地に照査したところによれば、被害地の人民は殆んど自放自棄の有様に陥つて居る、彼等は恒産を失つた爲めに恒心を失つて居る、恒心なきものは道德などを考へて居る邊はない、所謂衣食足て禮節を知るの反對に着るに衣なく、食ふに粟なき彼等は全然禮節なきを問ふて居る閑はない、一度破綻すれば如何なる暴舉をも

辭せない風が見ゆる、而して彼等は他に職業を求むるか他所へ移住するかについては更に考へない、雷に日に荒れ行く田を眺めて空しく長大息し頼りなき行末に向て微かな望みをかけて其日々を送つて居るといふ有様である、是は某といふ大庄家の宅地であつたが今はかくの如き荒蕪の有様に變じた、これは某の田地であつたか、今はかくの如く茅の生ふるに任かしてあるなどは粗朴なる農民が、涙片手に物語るところである、勿論多少の誇張は免かれない、凡ての原因を鑛毒のみに歸するは如何と思はるゝけれども、その大部分はたしかに鑛毒の被害を被つた結果たるは争ふ事を得ないのである、殊に吾等の最も驚いたのは自治の機關か悉く廢れて居るの一事である、こゝに同情をひいたものは被害地小學校の有様である、明治聖代の一大美事として普通國民教育の完成は何人も之を疑はぬところである、如何なる寒村地に行つて見ても小學校はガラス戸作りの建築物を見ないところはな、教育でも教材でも一通の設備は不完全ながらも一通具備して居る、吾等は山間の邑を旅行して、見る際もない寒村には不似合な建築物を見て其小學校なるを知り、無邪氣な野童も優渥の皇恩に浴して開明に進む喜び、會々祭日などに當つて何時見ても心地のよい日章旗が躍らかな日影に翻つて居る、校舍の窓を通して君か代の合唱を耳にする時は何ともいへぬ快感に打たれるのである、吾等は不幸にしてこの例外を被害地の小學校に目撃して長大息したと共に、教育上の大問題として空しく觀過するを得なかつたのである、尤も吾等の見

たるは海老瀬村と谷中村の二村についてであつて極めて一小部分の觀察に過ぎない、また被害地外の村落にある小學校と比較するの機會がなかつたから、此地方が一帯に教育に不熱心である爲め、單に被害の影響で然るではないか、さうかを確かめるとか出來なかつたが、この道小學校教育の全然行はれて居らぬといふてもよい程の有様たるは事實である、その内一校の如きは普通の民家の軒傾き柱の曲みたる薄暗き一室に一年級より四年級迄の兒童が收容せられて、學校らしきものは黒板一枚のみで殆んど徳川時代の寺小屋はかくもあつたるうかと思はる、計である、而して教員は只一人のみ一ヶ月の經費は十三圓五十錢との事である、一人の教員が四ツの級を一室内に教ゆる學校は日本全國に又と見るとを得ない奇怪の現象であらうと思ふ、然もそれか中央帝都を隔つると僅かに十餘里の所で、交通の機關も供つて居る目と鼻の間に存在しやうとは實に驚かざるを得ないのである、十三圓餘の經費貴人か一夕の食にも足らぬ貴女か指輪の十分一にも足らぬのである、而して被害地の窮狀は之をしも維持するに難しとする有様である、吾等はここに至つて知事の健在と文部省の存在とを疑はざるを得ないのである、この事實によりて被害地の一般か如何に荒敗に歸して居るかを知らぬに難くないと信ずる、斯の如きは實に日本の社會問題として國民全體が解決の任に當るべきであると思ふ、被害民にパンを興ふるの道小學校教育を補助するの法、人口の減少を救済するの法、その他何れの點より見るも一の社會問題として確に世人の注意を値するものと信ずるのである、(完)

るものと信ずるのである。何事にも迂遠なりと稱せらる、佛教徒は該問題につきてもまた人後に落ちたのである、而してそのいふ所をきくに外教徒之につきて論ず、佛教徒豈に黙するを得んや、外教徒視察を爲す佛教徒また爲さざるは耻なりといふ風であるのは實に歎すべきであると思ふ、論すべき問題ならば大に論すべく、視察を可とせば視察また可なりである、徒に外の爲すところに倣いて外見を装ふか如きは最も不可である、然したと以後れたりとも爲さざらんには如かずであるから、佛教徒として如何に此問題に處すべきかを定めて進まなければならぬ、外でもない佛心者大慈悲是也の教に基きて一方には被害地の慘狀を見舞ひ、一方には廣く天下に向て同情の念を惹起せしめ、輿論を作つて行政者をして一日も早く責任ある解決をつけしむるに力むることである、往年愛宕の大震災又は三陸の大海嘯に對して其救護に當つたと同じ格で出來る丈之を救はねばならぬ、然し前にもいふた如く、被害の病根にして根本的に治療せられぬ限りは、姑息の救済は恰かも無底井に石を投ずると等しく際限のあるものでない、被害が一時的でない代りに救済も一朝一夕では出來ぬ、只一時一方に其窮を救ひ一方に大に世人の注意を起し、夫々の責任ある専門の人士に是が解決を促がすより外はないのである、何れにもせよ問題があまりに長時間的で且範圍が極めて沙漠であるが爲めに、手の付け様がないといふ感はなきにしもあらずであるが、結局その爲めに放擲すべきものでないとは明かである、吾等は

實地照査に基きてこゝにひろく世の仁者に訴へて、同朋の窮狀を救はんことを勸告すると共に、佛教徒もまた自家の分野に於て救済と輿論の喚起とに盡すところあらんを望まざるを得ないのである、鑛毒問題を單に政治問題と見てそれ觸るゝはやがて政治に關涉するものと誤解して居るものも少ないと思はれるか、それは大なる誤りである、自家の範圍に於て充分盡すべきであると信ずるのである、(完)

道徳的意志の養成

(ヘルバルトの教育説) 補 龍 造

古來教育の目的を論ずる哲學家、教育家、其數頗る多く、小指を屈するも猶ほ足らざらん、吾人は今「ヘルバルト」(Herbart)の所説に隨ひ、教育の目的は、道徳的意志を養成し道徳的品性の人物を養成するにありとの説を攻究せんと欲す。有徳の人とは智識豊富の人にもあらず、感情熾盛の人にもあらず、倫理的善として明智の判斷する所のものを行ふ、意志堅固なる人、即ち有徳の人たるなり。然らば則ち斯くの如き人物を養成するかは、如何なる手段方法によるべきか。

教導上の二方法

教育者が被教育者を教育し、道徳的意志強固なる人物を養成せんと欲せば、教導と教授の二者に依らざるべからざるなり。元來教導と教授とは自然其趣を異にするものにして、教授は第三者を用ひ、間接に被教育者の上に働き、教導はこれに

ことなり、直接に被教育者の上に働き、被教育者の品性を陶冶するを以て任するものなり。而して教導は其作用二種に分る。(一) 被教育者の慾望を抑制し、不良意志の發生を防ぎ、一定の秩序に従はしめ、以て道徳的意志養成の妨得を避くるにあり。其故は被教育者の幼稚なるや、未だ道徳的意志に乏しく、獨り鋭敏なる肉體的慾望盛にして、不秩序なる我意を有し、萬事自己の意のままになさんと欲して、其慾望を制するを知らざるなり。爲に其將來の人となり少なからざる損害を招くに至る。其之を抑制するの手段は、秩序を定めて之に服従せしむるとを目的とせざるべからず。秩序に服従せしむるには先づ、其一般の模範を立るを要す。其模範とは何ぞや、

- (a) 實際上の秩序 (b) 事物上の秩序
- (c) 時間上の秩序 (d) 行儀上の秩序

實際上の秩序とは、長者を敬し己を謹しむ、各自の成すべき權利と守るべき義務とを重せしむるにあり。事物上の秩序とは、事物を處理するに當り、必ず一定の規律に従はしめ、其亂雜をさけしむるにあり。時間上の秩序とは、出入等に時間を守らしめ、時間の約束を固くするにあり。行儀上の秩序とは、不作法不行儀亂暴の外を律して、其品格を保つことに注意せしむるにあり。此の如き秩序を定め、被教育者の欲望自由を規制することは、被教育者の道徳的意志を、鞏固にせんための消極的手段なり。

(二) 被教育者の意志をして、道徳的意志を規制する方向を維持せしめ、その將來に於ける意志をして、全く道徳的に使

用する、人物たるを得せしむるにあり。是れ被教育者をして、
 道德的意志を養成せしむる、最主要の點なり。「ヘルバルト」
 云へらく、「眞の教育は、被教育者をして自ら指導し、自ら裁斷
 して道德を行ひ不道義を行はざるに至らしむべきにあり」と、
 之に依て之を思ふに、被教育者をして自家の自裁的動機によ
 り、自家の意志を使用せしめ、且つ其自裁心を高尚ならしめ
 んことを勉めざるべからざるなり。又天賦の稟性にして各個
 人の道德的品性陶冶上に補助を與ふるものは、十分之を成長
 發達せしめ、永久不斷の活動をなさしむることを圖るべきを
 要す。「プラトール」(Plato)また言へらく「徳は唯だ徳に依て
 教ゆるを得べし。道德的模範は、まさしく被教育者をして、
 教育者を親愛する心と及び之にならばんことを欲する心とを
 生せしむるにあり」と。見よ教育者の良否如何は、幼少なる被
 教育者の天真爛漫たる内心に影響するものなることを。故に
 教育者の人物如何は實に重大なる關係あるものにして、その
 人物の與ふる潜勢的感化力は被教育者に無限の影響者あり。
 此勢力の及ぶ所、被教育者の意志に對し、教授の教育的勢力
 の決して企及する所にあらざるなり。是れ鞏固なる道德的意
 志を養成するの積極的手段なり (未完)

社 會

四週年を迎ふ

歳茲に改まり祥雲靄鬱たる明治三十五年を迎ふ、而して本

誌も亦四週年を迎へ第七十號に達する盛運に會せり、これ豈
 昌平の餘澤にあらざりして何ぞや、願ふに本誌が明治三十二年
 一月一日呱呱の第一聲を擧げし時、恰も巢鴨監獄教師事件
 の紛擾に際す、吾人は信仰の迫害を見るに忍びず、大聲疾
 呼天下に向て其非を鳴らし、遂に凱歌を奏せしことは讀者諸
 君の尙記憶に存する所ならむ。
 殊に明治宗教史上特筆大書せらるるも宗教法案は、其年十二
 月を以て突如として帝國議會に顯れぬ、教界の騒動を招き天
 下の物議を起せしこと、明治以來多く見ざる所ならむ、而し
 て本誌が其間に立ちて毅然として毫も歩調を紊さず、堅忍不
 拔、主義を一貫し能く其任務を全うしたることは、敢て贅言
 を費す迄もなくこれ亦諸君の熟知する所ならむ、更に眼光を
 一轉して社會問題、慈善事業を鼓吹したる所以のもの、實に佛
 教者の實力を養成せんが爲めなり、由來宗教家は理論に走る
 の癖ありて、實行を重ざるの美風なきは宗教家一般の弊害な
 らむ、實力を收めずして嗷々喙々するも何の益する所かこれあ
 らむ、如斯は宗教は寧ろ國家に益なくして害を與ふるもの、
 國家は將に法律を發して宗教の宣布を禁止せんとするも宗教
 家は何を以て争はんとするか、宗教家たるもの大に活動一番
 せずして可ならむや、
 歳茲に改りて、本誌四週年を迎ふと雖も、其主義、其主張
 に於て些の變ずる所なし、吾人は片々たる小冊子を以て自ら
 甘んずるもの其體裁を飾り外面を美にし讀者に媚んとするか如
 きは吾人の甚た好まざる所なり、吾人の本領と抱負に至りて

は他に存するを以てなり、此の片々たる本誌か他日教界に向
 て一滴の効を擧ぐるを得ば吾人の望足れりと云ふべし、吾人
 は歳新なるの故を以て聊かも從來の主義方針を變ずることな
 し、只讀者諸君と共に發奮勇を鼓して前途に横はれる大問題
 を實行せんと欲す、大問題とは社會事業即ち是なり、茲に吾
 人の覺悟を述べて四週年を迎ふるの辭に代ふ

小學校教師たれ

從來一ヶ寺の住職にして小學校教師をかぬることは、地方
 によりては出来難き都合なりしが、今回文部内務兩省協議の
 上、其任命は地方廳に、任することとなり、非常に便宜を得
 たりと云ふべし、地方僧侶にして小學校教師となり、國民教
 育を司るに至らば漢大の効力あらむ、從て僧侶自身の品行方
 正となり從て信徒の歸依を篤くするや必せり、希は天下遊民
 の誹を免るゝを得んか

宗教法案

宗教法案昨年の議會に於て一旦否決されたるは、條文の不
 備にして現在の宗教に適應し難きを以て也、宗教法は永久發
 布せられざるべしと思ふは大なる誤謬にして、政府に於ては
 銳意之が調査に従事しつゝあり、爲めに歐米各國に派遣視察
 せしめたる清水某は新に歸朝せられ取調に着手せりと傳ふ、
 宗教法は遅かれ早かれ必ず提出さるゝものにして、宗教家は

教界彙報

- ◎去月廿三日より大谷派本願寺にては普宿會を開たり
- ◎本年一月より曹洞宗管長に西有稻山師代る由
- ◎先月續海地實地視察として東京より、島地、村上專精、和田鼎諸氏出
 張せり
- ◎大谷派本願寺にては去月臨時局開會せしか、賛衆の多數は同盟進退して上局役
 員を彈劾の上申文を、開會場頭に提出せんとしたるを以て、直に停會を命ぜら
 れたり其原因は主として財政上の整理に付、信徒中より役員を選び會計部の役
 員と共に加議會を組織し、會計取締事務等の重任を負はしめたるは議政局賛
 衆を無視したるにありと云ふ、併し當局者も調停成れり云へば日出度事そ
 かし

紛々録

- ◎雲棲大師曰く
 未し知二人道一焉知二神道一
 行誠上人の歌に
 忠孝の道より外に道はなし
 佛の道もこれよりぞ入る
 ◎白隱禪師は曰く
 君に忠親に孝なる人しあらば
 みのかきもやる糧も發し
 古の高僧大德にして未だ人道を無視したるものを開かず、今の宗教家少しく顧
 みて可也
 ◎三浦梧樓將軍は雲棲大師の竹窓隨筆(一名蓮池餘香)を讀て非常に敬服し居らる
 由以て將軍其人の嗜好を窺ふに足る

◎山陽先生曰く
詩經に流石(石)歌、書經に御沙汰書(心)得べし
と、山陽先生をして當時流行の二東雲のストライキ節をきかめは將に如何なる
思ひなさんとするや

多謝

諸君

本誌を發刊してより茲に四週年を迎ふるの好運に逢
せり、これ一に讀者諸君の高庇による、本誌第一號
より今日迄運搬して愛讀せらるゝ、諸君實に二千五
百人の多きに至る、吾人益々微力を盡くし以て讀者
諸君の幸愛に酬いんことを期す、

雜錄

臺灣の新年 柴田常惠

臺灣とは云へ今は帝國の版圖であるから内地人の移住する
ものも少くない、其故新年の儀式も諸官衙と内地人の居宅と
は内地と同様である、即ち枝振奇しき臺灣産の松と竹とにて
門前を飾り、盆裁もあり雜煮餅もあり追羽子も爲すのである、
すべて新年の儀式に要するものは細大となく内地より送られ
る、實に三河萬歳まで新年を當てて出稼に行く、唯其る所は
蚊帳を吊り寒いと云はずに年賀に回ることである、
併し之は内地人丈のこと、支那血統に屬する土人の新年は
依然として支那風を守り第一陰曆である、それゆゑ内地人が
新年として喜ぶ時に彼等は關せず焉と澄まして業を爲し居
る、今此に少しく土人が新年の模様を述べて見よう、
年末は何處も同じく忙がしいもので何となく商家は活氣付

き、織物、雜貨など販賣する店は特に忙がしいが、夫も大晦
日の午後には漸く静まり、門々家々大體の用意が調ひ、來ら
むとする新年を待つのである、
さて新年の式は之を開正と云ひ元日は子刻(即ち午後十一
時より午前一時)に行ふので、官民男女老幼の別なく萬象
更新の意を取て新衣に交へ、恭しく香案を設け香、燭、牲、
體を供し、家長は家族を率ゐる衣冠を整へて先づ天地に對し、
次に家廟の神前及び祖先の位牌に向つて各三跪九叩の禮を取
るのである、それより其年の喜神のある方角に向つて香案を
供へまた三跪九叩の禮を行ひ、祭り終りて後喜神の方角へ數
歩進むのである之を出行と呼び其意周歲好運に遭遇するを
期するので、出行の式を終へて一家の子女ば長幼の序に従
ひ、家長に新年恭喜を唱へて一跪三拜の禮を爲し、僕婢もま
た家長夫妻に年賀の辭を述べ、それより家宴を設けて年糕を
食ふのである、終日一家の老少は皆恭敬を旨とし丁度大賓を
遇する様な有様で、悪言を放たず罵聲を警め最も器物の破損
を忌み嫌ひ、三日の間は帚や糞尿を門より出さない、
神佛や祖先の祭祀には必ず爆竹を發し金銀の箔紙を焚く
が、新年に發つ爆竹の響は各所にて爲すことゝ頗る壯快な
もので、もと爆竹は竹を焚きその節の爆聲で悪神を逐ひ退く
としたものであるが、今日では鞭砲に變化した、また金銀
の箔紙を焚くは在天の神佛や祖先に金銀を献する意を寓する
ので、神佛には壽字の金紙を用ひ祖先には銀紙を用ゆる等一
定の制がある、

年賀は元日より三日の間で拜賀新年、拜年又は賀正と云
ひ、富家名族は六寸に三寸程ある紅紙の名刺を以て回禮し、
普通の者は名刺を持たずに行き、賀客來りて先づ新年恭喜を
云へば主人之に應じて恭喜々々と唱へ、氷砂糖の入つた茶を
薦め、豫て紅棗、紅橘、瓜子、落花生、糖瓜等の菓物を盛り
賀客に供すべく待たれある漆盤より主人手づから紅棗を取
り、紅棗を食へば年中運が好いと云つて客にすゝめ、又紅橘
をすゝめば年中大吉と云ふ、之は橘吉同音であるからであ
る、中々土人は延喜を云ふものだ、客に依ては年糕や酒肴を
も饗するので、酒は大抵紹興酒、紅酒、氣酒、肴は小皿に盛
つた豚、鶏、鴨、魚である、小兒が年賀に來れば百文程一厘
錢を紅繩に串結して贈るが之を掛紅と云ふ、
春聯または門聯と云ふものがある、之は桃符を門楹に貼つ
て邪を避くる古例より來たもので、紅紙に目出度對句を書い
てある、必ず門戸、楹柱、門扉に此日黎明に貼るべきものだ
が前日に貼る家もある、而して明年まで剥ぎ取ることとはな
い、併し喪中の家は紅紙でなく黄紙である、一般に紅は吉黄
は凶と定つて居る、之も矢張歳末に賣り居るのを大抵は買つ
て來るのであるが、門扉や楹柱に直に春聯が書かれてある家
もある、斯様な家は年々貼付る要はない、今春聯の二三を示
すなら、

前門扉には (左) 門丞 又は 加冠
(右) 戶尉 晋爵
大門柱には 帝德乾坤大

皇恩雨露深
天增歲月人增壽
春滿乾坤神滿門

楹柱には 春滿乾坤神滿門
利如曉日騰雲起 又は 生氣興隆通四海
財似春風送雨來 財源茂盛遠三江

酒樓なら 聞香須下馬
知味可停車
又妓樓ならば 一雙玉手千人枕
半點朱唇萬客嘗

といふやうな次第である (未完)

信家

永久の命

和田鼎

私共は限りなき空間に立ち究りなき時間のうちに生息する
ものであつて、現在の身に其空間中の極微の小部分現在の生
命はその無限の時間中の極短の一部を占むるに過ぎない、一
方には有限であり一方には不完全のものたるに過ぎないので
ある若し一部の淺薄なる物質論者がいふ様に、人間が只僅か
この世丈で煙の様に消ゆるものとしたならば、人間の價値は
全く無くなつて仕舞ふのである、丁度夏の最中に一玄きり鳴
き立て、秋の色の深くなるにつれて果敢なく消ゆる夏蟬の命
と更に何の撰む所もないのである、人は蟬の命の果敢なきを

唧つけれども、その實無限時間に人生の行程を比較したならば、人が蟬の命を果敢なむより更に一層憐れな生涯といはねばならぬ、吾等は是うしても人世を去く偶然のものと思ふことが出来ぬ、眞面目に人世を考へねばならぬ、そうして吾等はこゝに無限の命を得ざれば心の満足を得ることが出来ないのである、夫が爲めに色々研究を積んで見て安心を得たいと思ふけれども、研究すればする程解らない疑ひ出せば際限がない、又自分で手造りにしたら安心であるからして「コロリ」と變じて、さらに確固不動の状態に達することが出来ぬ、昔しきりしやのそのかみから哲學の研究は今に至つて絶わぬが、人世について果してどれ程の解釋を加へたであらうか、汝自身を知れといふたデルファイの樂書は未だに未決の問題として二千餘年幾億萬の人間を嘲笑して居るではないか、こゝに至つて吾等は人間の能力に疑ひを生じて誰れやらの馬の話しを思ひ出さざるを得ないのである、馬を繋いで置けば馬がいかに精巧でも繋縛を解いて逃げ出す事は出来ぬ、先づ馬の能力の極點は力まかせに引チギツて逃げる位に止まるのである、言を換ていへば繋縛を解くといふとは馬の能力を超へて居るのである、丁度夫と同様に人間が有限の者でまた不完全のものでありながら、無限の眞理完全な原理を究めやうといふのは、馬が繋を解かんことを待つと一般であるかも知れぬ、即ち人間の力を超越して居るのかも知れぬ、夫をも知らずしてたのみ難き自己をたのみにして居る人は、この馬と何の撰ぶところもないものといふてよいのである、

かないとしたならばこの世の中に眞正の道徳は存在することが出来ぬ、五十年丈のものならば出来る丈悪いことをするも一向に差聞かない所謂其日暮の極めて殺風景なものとなつて仕舞ふのである

凡そ人間に取つて命は甚だ大切なものが又どあろうか、今時の人が金力の萬能を唱へて命より金が高しといふ云様な事をいふ人があるか、いざ金と命と取捨となると幾萬の金をも擲つて命を助からうとするは必定である、命あればこそ金の用はある命かなければ金もまた用はない筈に金のみでない凡て一切の物皆然りである、支那には道教が今でも盛んで不老不死の仙術を傳へるなどの迷信が多いが、これなどは人間かいかこの短かく果ない一生をたよりなきものとして生命を愛着して居るかをあらはして居る「命あつての物種」といふ俚言もよく聞く詞で中々勢力のある諺であるが、是又いかに人間か命について重きを置いて居るか解る、然し道教がいかにりきんで見ても未だ嘗て千年の生命を保つはおろか五百歳の生命を保ちたるためしはない、遅かれ早かれ一基の石の下に眠らねばならぬのである、この果ない人生短少な生命を持つて夏蟬の命と同じ様に消えて行くのを更に何とも感しない人は實に淺蕪な人である、あの小さな憐むべき蟬と更に何の撰ぶところもない人である、人に永久の生命あることを知らない不幸の人である、然し若し今こゝに人に永久の生命を興へようといふたならば、百萬金を投じて其方法を聞かんとするものは數へきれない程あるに相違ない、然しそれはこの肉體の

永久の生命を欲するものはこの馬であつてはならない、諺に「若い時は二度とない」人間僅か五十年」などいふことがある、そうしてこれが極めて悪く用ひられて居る様である、またこれが情け者に取つて極めて有効の助言となりて下手な格言よりは實際の世の中に勢力がある様である、若い時は二度ないから寸分の光陰をも節して少しでも善い事をせねばならずまた人世につきて眞面目に考へべきである、安心立命の問題を解くに力めねばならぬのである、蓮如上人の語に「佛法者申され候若き時佛法はたしなめと申候年よれば歩行も叶はず睡くもあるなり只若き時たしなめと候」といふてある、これは若い時は二度とないといふ諺を平易に解し得たものと思ふ、然るにその反對に若い時は二度とないから遊べる丈遊べ少しの暇位は意とするに足らぬと自分勝手に理窟をつけ、又世間一般の人も之を寛恕する風があるのは奇怪千萬である、これは人に永久の生命あることを知らぬから起る禍であるまた、人間僅か五十年といふ諺もろうである、定命を保つて僅かに五十年である、况んや無常は萬衆の免かれ得ぬ道理であるから、健全のうちにも少しでも善行を爲して報恩の誠をつくし、永久の生命を得て安心の域に到達せねばならぬことを警告した諺であるが、之れがやはり全く反對の意味に用ひられて、少しく失意の境に陥つた人はすぐこの諺を思浮べて、人間僅か五十年だ、短く太くやれなどいふ氣になり非常の罪惡を犯す様なことが往々にしてある、これもまた人に永久の生命あるを知らざる愚者の誤見である、人に永久の生命

生命について永久にありたいと願ふのであつて靈の不朽を望む者ではないかも知れぬ然し吾等は肉體の生命のみを人の命と思はぬ肉體は固より四大所成のものであつて無常の數に免れることは出来ぬ、管靈の生命に至りては永久存する事を得るのである、人が最も愛着する命それが永久に存するものである、故に一度宗教に入つて信仰を握つた人はたゞ其人かドンナ愚者でも人間としての價値は實に大なるもので蟬と同様な果ない意氣地のない人間とは大に撰を異にするものといふてよいのである、人が永久の生命あることを信じたならばその人は眞に樂天家で、如何なる危難をも笑つて越える事が出来る、如何なる困難にも更に意とするところはなく、一切の行動悉く意のままに進むことか出来様と思ふ、また眞の道徳はかゝる人に於て初めて行ひ得らるることと思ふ、要するに命を又なきものとして惜む人間か永久の命を望まぬ筈がないではなからうか、果して然らば如何にしてこれを得らるか管一切の我情を排して無量壽の如來を信するにある。

家庭教育

白 山 生

◎子供は最賑やかで、和樂せしむる者で、家庭には主人公と言ても宜しい、子どもの無邪氣に笑つたり騒いだりする所を見ると、如何に平生は苦虫を噛み潰した様に、又笑へば損

をするといふ様に、澁面作て居る人でも、思はず満面に笑みを
含み、或は吹き出すことがある、又子どもに對つた時は如何
に平生權利の義務のと言て、矢張り議論ばかりして居る人
でも、己れ知らずとたわひなく子供のやうな戯をし出すもの
である、實に子どもといふものは、家庭團樂の間に與へられ
たる天使で有て、邪念悪心を去て清淨無垢ならしむるもので
ある、

◎此子供を育養するといふことは、甚だ六ヶしいものである、
天性丈夫な體質の子は、殆ど捨て、置いて、ズン／＼發育
て行くが、天稟脆弱の小兒と來たら、夫は／＼面倒なもので
ある、乳なども乾酪よ牛乳よ乳母よと、色々騒いで取換れば
取換へる程、却て其子の爲に宜しく無いやうになる、

◎有體にいへば、嬰兒の病體は大抵の醫者でも知れないのが
多いから、病氣と成つたら、實に面倒なもので、藥でも色々
取り換へてばかり居ても、兎角に効能の無いものである

◎夫に乳汁の善惡程分りにくいものは無い、顯微鏡で見ても
化學上の分拆をして見ても、逆も乳汁の善惡は知れぬので
は無、成る程夫々の試験する器械もあるから、夫で一應は
試験もして見るもの、試験成績が不良の様なら、無論
嬰兒に飲ませることは出來ない、が併し試験の成績が良好で
あるからと言て、必ず其子に乳汁に適するとは言へない、其
乳汁と其子と適不適があるから、

◎夫故母親が病氣であるからと言て、必ず其乳汁が其子の爲
に適せないとはいへない、随分病人の乳汁を飲みながら、丸

丸と太りて成長する小兒も澤山ある、元來實母の乳汁は先其
子の爲には適當であるべきものであれば、成るべくなら、母
親の乳汁を飲ませるに若くことは無い、

◎故福澤先生の新女大學にも、其第一條に「夫れ女子は男子
と等しく生れて父母に養育せらるるもの約束なれば其成長に至
るまで兩親の責任輕からずと知るへし多産又は病身の母なれ
ば乳母を雇ふも母體衛生の爲めに止むを得ざれども成る可く
ば實母の乳を以て養ふ可し母體平生の健康大切なる所以なり
小兒は牛乳を以て養ふべしと云ひ財産家は乳母を雇ふこと易
しとて母に乳あるも態と之を授けずして恰も我子の生立を傍
觀する者なきにあらざ大なる心得違にして自然の理に背く者
と云ふ可しとある、女大學全體に付ては、彼是評論もあるが
此條は實に尤の事である、實母が己れの乳汁を以て、養育す
るのは哺乳動物一般の天則である、

(未完)

一金二圓也

加賀大聖寺町 小島啓次郎殿

累計二百九圓四十八錢

若本會基本金の中へ御寄附被下候故謹て茲に厚意を謝し候
也、尙同氏は左の書狀を寄せられたり
國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を期圖せられ、以て佛教
の信念を確立せらるる、貴會の御盡力を謝す、從來貴會の示
教に依り其感化を蒙ること尠からず、愚生實に感謝に堪え
ず云々敢て當らざる、雖も厚意は深く謝する所なり

一月 大日本佛教徒同盟會本部

新刊紹介

釋宗活著

性海一滴

神田佐久間町 白鳩社
本書は佛教論佛心宗歴史宗意入道要訣の四節を分ち極めて簡潔に釋宗の大意
を序述されしものなるも尙能く其要を失はざるもの、如し而して本著述の目的
は門外未學の士に示すにあれば荷も心算の修養に志あるもの一讀得る所少からざ
るべし(定價廿五錢)

佛教講話集

京都東六條 法藏館
今年伊勢四日市で開催せられたる關西佛教青年會の夏期講習會に於ける高僧碩徳の
講話を身とれたるものなり、年中講師の小傳を附せられたりか如き以て注意の周
到なるを窺ふべし(定價三十錢)

沙石集

十善法語

同 同
右二書は法華節十週年の紀念として今回特に廉價を以て販賣する、由

佛教唱歌

淺草清島町 雅樂講習會
大谷光榮師釋尊照律師等の歌詠に音符を付して發兌されたるものなり幼年教會
などに於て唱歌して用ひはれる適當なるべく思はるべし(定價十三錢)

急務檄言

神田錦町 文學同志會
書きに袖珍形を以て出版されしが今度大に増刷を改め菊版として第三版を發行
するに以て才が世に歡迎されるを知るべし(定價三十錢)

廣告

恭賀新年

大日本佛教徒同盟會本部

謹賀新年

在伯林 近角常觀
一身田 本多辰次郎
百目木智璉

謹賀新年

東京常盤大定

謹賀新年

大日本佛教青年會幹事 和田鼎

謹賀新年

在東京 桑門典

謹賀新年

東京柴田常惠

謹賀新年と賀す

函館武宮環

恭賀新年

越前武生町 伊香間誓運

恭賀新年

越中 乘杉教存

謹賀新年

越中 五十嵐成滿

謹賀新年

富山縣 大谷賢了

恭賀新年

北京順治門外 西山榮久
上斜街東文學舍

謹賀新年

本郷森川町一 清澤滿之
浩々洞内 楠龍
多田鳥敏
佐々木月樵

三名家佛教演說集

島地嘿雷師 本書は佛教界の泰斗たる三老師が年來公
 南條文雄師 開の席上に於て爲せる演說を集めたるも
 小栗栖香頂師 の也

新刊 美裝全一冊
 代金廿五錢
 郵税金四錢

愈々出來

著 融 田 内 士 學 文

モルモン宗

(錢二金稅郵錢五十金價定) 本美珍袖

モルモン宗は海を渡りて米
 國を來れり、世人は彼を敬
 迎せんとするがモルモン宗
 は我同胞の間に傳へられん
 とす、世人は彼を信奉せん
 とするが、彼宗果して如何
 なる教ぞ、彼宗傳道の結果
 如何、是れ識者の夙に憂ふ
 る所、本書は詳しく
 彼宗の成立の歴史を尋ね、
 かに教義の組織を説き更ら
 に米國政府と彼宗との關係
 を明かにし、彼宗の現時の
 勢力の由て起る所を論究
 せるもの、宗教家は勿論世
 教に志あるの士は一讀して
 彼宗の性質を明かにし再考
 して對モルモン宗の策を講
 せよ

眞俗 領解文百席談

慧燈大師山科御廟石版圖島地默雷師題字
 中澤信子序文小野島行齋師說教

第三版 洋製美本全
 二冊實價金
 五拾錢郵稅
 金八錢

信心獲得章說教

石河仲將師述

第三版 實價金拾參錢
 郵税金貳錢

著 師 將 中 河 石 字 題 師 初 篤 田 武

白骨章說教

錢四金稅郵錢六十二金價定

白骨の御文章は、中興大師衆生化益
 の熱誠より、老少不定の境界草露風
 葉の人命なることを詳述し玉ひ、拜
 讀者をして戰慄せしめて、後生の一大
 事を驚覺せしむる巧妙の御文章なる
 ことは、世の遍く知るところなり、
 本書は師が本章の造由出處を詳述
 し、章句文字を正解し、引用の格言、
 詩歌、譬喩、因縁等は、内外諸書を
 涉獵して尤も斬新なる者を選び、無
 常談は勿論、安心報謝、ことに當時
 に適切なる俗語行儀忠君
 愛國の公德等に至るまで、
 平易明快尤も 現實的に尤も活
 動的に活談せられたるもの也、幸
 に一讀し玉はれば自己の 信念に
 資するのみならず、布教傳道の良師
 友たる萬々なり、

聖人一流章說教

梅原教願寺述

第三版 實價金拾五錢
 郵税金四錢

發行所

大日本佛教徒同盟會出版部

(電話番號本局二四三三番)

發行所 東京市本郷區 文 明 堂 東京市本郷區 興 教 書 院